

長崎の教会群とキリスト教関連遺産 — 長崎から世界遺産を！ —

第21回目



大浦天主堂 ©日暮雄一

長崎県世界遺産登録推進課

■はじめに

今号では、これまで紹介してきた構成資産の価値や魅力、世界遺産のストーリーを総合的にご紹介いたします。

■構成資産のグループ

構成資産は、「城跡」・「集落」・「教会建築」という3つのグループに分類され、13の資産からなりたっています。

◇「城跡」

「城跡」である日野江城跡と原城跡は、キリシタン大名の有馬氏が築いたもので、キリスト教が伝来したのち宣教師との直接の交流の場となりました。それらはまた、ヨーロッパとの貿易や文化的交流が長崎地方にもたらした繁栄を伝えるものでもあります。日野江城は、仰信組織がキリシタン大名のもとで形成されたことと関連しており、原城跡は、海禁体制への確立へとつながった「島原・天草一揆」の戦場でもあります。

◇「集落」

平戸の春日、天草の崎津、五島列島の野崎島に所在する「集落」は、潜伏キリシタンが密かに信仰を継承するなかで、日本の伝統、



日野江城跡・原城跡空撮



春日集落と安満岳 ©日暮雄一

習慣、環境の影響を受けて、独特の文化的伝統が形成されたことを示す代表的な場所です。これらの集落は、潜伏キリシタンが崇敬した殉教地や古くから崇められた山岳などの聖地を含んでいます。宣教師がいないなか、それらの場所は信徒たちにとって教会堂の代わりに信仰を支えるものとなりました。

◇教会建築

「教会建築」は、19世紀に日本が開国し、来日した宣教師によって建てられた大浦天主堂をはじめとするカトリックの教会群です。それらは数世紀にわたる密かな信仰継承の証として密かに信仰を守ってきた集落に建てられました。素朴ながら豊かな地方色と多様性を有し、日本とヨーロッパの間の建築技術の交流、及び日本文化とキリスト教との間の交流を示しています。これらの教会堂の内部は、祈る者の心を天に向けて高揚させるような高さや明るさを有し、室内がほの暗く、横長で低い日本の伝統建築とは対照的です。



黒島天主堂内観 ©日暮雄一

これらの教会堂の分布は、16世紀に日本に伝播したキリスト教が途切れることなく継承された場所が長崎地方であったことを今日に伝えています。教会堂や集落、城跡は地域の人々によって大切に守られ、これらの資産があらわす豊かな宗教的文化は今なお生き続けています。

コラム

先行して世界遺産登録を目指す 「明治日本の産業革命遺産 九州・山口と関連地域」

端島炭坑 ～石炭の繁栄と衰退を物語るかつての海底炭坑～

高島の北溪井坑の操業を機に、その南西3kmの端島でも、旧深堀藩士らによって採炭が試みられました。しかし、厳しい海洋環境に阻まれ、なかなか成功には至らず、ようやく第1堅坑が開坑したのは1886年のことでした。その頃、既に高島の鉱業権を取得していた三菱は、1890年に端島を譲り受け、本格的な採炭事業に乗り出します。海底深く掘り進められた第2、第3堅坑が開坑すると、その生産量は高島を上回り、その後も高島とともに高品位炭を国内外に供給しました。それは、北溪井坑に始まる蒸気機関の導入、そして電力の導入と併用、転換という、先進的な機械設備の導入による技術開発があったからです。



また、かつて岩塊の小島であった端島は、採炭事業の発展に伴う埋立てで拡張され、その周囲には堅牢な護岸が築かれました。この限られた土地に、多くの坑員やその家族を住ませるため、日本初の鉄筋コンクリートの集合住宅が建設され、徐々に、高層住宅が林立する独特の景観が形成されました。

海底炭坑の島として開発され、閉山から40年を迎えた端島は、石炭産業の発展と衰退を今に伝えています。